

有為な書道教員を養成するための教材開発

— 新たな授業実践を通して考える —

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
東京学芸大学	加藤泰弘
桜蔭中学校・高等学校	大野幸子
群馬県立高崎工業高等学校	國定貢
千葉県立国府台高等学校	後藤浩
埼玉県立三郷北高等学校	齋藤正夫
千葉県立匝瑳高等学校	鈴木幸子
栃木県立宇都宮中央女子高等学校	五月女章子

目 次

1. はじめに —本研究の位置づけ—	82
2. 本研究の役割分担	82
3. 「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」を受けて	82
4. 授業実践の検討	84
4. 1. 漢字仮名交じりの書 三好達治の「雪」を書く	84
4. 2. 漢字の書「行書を学ぼう 蘭亭序」	85
4. 3. 仮名の書「仮名の書の創作をしよう」	87
4. 4. 鑑賞「書の鑑賞 —博学連携と鑑賞メソッド—」	88
5. 研究を振り返って	90

有為な書道教員を養成するための教材開発

— 新たな授業実践を通して考える —

東京学芸大学附属高等学校	荒井一浩
東京学芸大学	加藤泰弘
桜蔭中学校・高等学校	大野幸子
群馬県立高崎工業高等学校	國定貢
千葉県立国府台高等学校	後藤浩
埼玉県立三郷北高等学校	齋藤正夫
千葉県立匝瑳高等学校	鈴木幸子
栃木県立宇都宮中央女子高等学校	五月女章子

0. キーワード

書道教育 教員養成 新学習指導要領 資質・能力 主体的・対話的で深い学び 授業改善

1. はじめに —本研究の位置づけ—

書写・書道部会では平成21, 22年度の2年間にわたり「有為な書写書道教員を養成するためのプログラム開発」と題して、主に教育実習生の事前事後指導に活用できるテキスト作成、それを使用した実践および検証を重ねてきた。本研究では近年クローズアップされてきている新たな教育課題に対応した書道授業のあり方を共同研究者の議論を重ねることで模索し、次期学習指導要領を見据えた授業実践を行い、検証・考察を加えることで新たなテキスト作成につなげていくことを目的とする。

2. 本研究の役割分担

本研究は附属学校と大学、そして公立学校および私立学校との共同研究として行った。その方向性と理論構築は荒井と加藤が、新たな授業実践の構想は各共同研究者を中心として共同研究者の助言を踏まえて行い、全体調整は荒井が行った。授業者は詳細な学習指導案を作成、適宜の時期に授業実践を行い、共同研究者を交えて振り返りを行った上で授業改善の方向性を見だし、次期学習指導要領に耐え得る学習指導案となるよう加除訂正を進めている。そして、研究全体を俯瞰しての「研究を振り返って」は、加藤が担当している。

3. 「芸術ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」を受けて

中央教育審議会の教育課程部会芸術ワーキンググループは、平成28年8月26日に「審議の取りまとめ」を発表した。「現行学習指導要領の成果と課題」を明示し、「育成を目指す資質・能力を踏まえた評価の在り方」や「教育内容の改善・充実」を記述し、「学習・指導の充実や教材の充実」では具体的な例示を行なっている。次期学習指導要領のたたき台とも言えるこの「審議の取りまとめ」から、これからの書道教育、芸術科書道の授業の方向性を探ってみたい。

まず、「現行学習指導要領の成果と課題」では、次のように述べる。

- 芸術科（書道）においては、書の文化の継承と創造への関心を一層高めるために、書の文化に関する学習の充実を図るとともに、豊かな情操を養い、感性や想像力を働かせながら考えたり判断したりするなどの資質・能力の育成等に重点を置いて、その充実を図ってきたところである。

- 一方で、書の伝統と文化を踏まえながら、生徒が感性を働かせて、表現と鑑賞の相互関連を図りながら能動的に学習を深めていくことや、書への永続的な愛好心を育むこと等については、更なる充実が求められるところである。

これを読むと、「書の文化に関する学習」や思考・判断という学習過程に重点を置いた学習が軌道に乗りつつあるという成果を認めているが、「表現と鑑賞の相互関連」、つまり往還的な学習の構想や「能動的に学習を深め」る、いわゆるアクティブ・ラーニングの実践、「書への永続的な愛好心を育む」という生涯学習を見通した取り組みに課題が見いだせることが理解される。

次に、各教科等を学ぶ意義は各教科等において身につける資質・能力の三つの柱、つまり知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の深まり、学びに向かう力や人間性等で整理されるとし、その中核にあるのが各教科等に根ざした「見方・考え方」であるとして、高等学校芸術科（書道）では次のように示した。

- 感性を働かせ、書を、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉え、書かれた言葉、歴史的背景、生活や社会、諸文化などとの関わりから、意味や価値を見いだすこと。

「書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉え」ることを、表現及び鑑賞の支えとなる指導内容としている。そして、感性の働きを、感じるという受動的な面だけでなく、感じ取ったことをもとに自己を形成していったり、新たな意味や価値を見出していったりすること、つまり能動的、創造的な側面まで含んで考えていることに注目したい。知性と感性を相互に働かせ、融合させることにより対象物を捉えていくことが重要であろう。

資質・能力の書道Ⅰについては以下のようにまとめられた。

（高等学校芸術科（書道Ⅰ））

- ◎ 書に関する見方・考え方を働かせて、書道の幅広い活動を通して、生活や社会の中での文字と書や、書の伝統と文化と深く関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ① 書の表現方法や形式、書表現の多様性などについて理解するとともに、書写能力の向上を図り、書の伝統に基づき、表現を工夫して表すための効果的な技能を身に付けるようにする。
- ② 書のよさや美しさを感じ、自らの意図に基づいて構想し表現を工夫したり、作品や書の伝統と文化の意味や価値を考え、書を味わって深く捉えたりする力を育てる。
- ③ 書の創造的活動の喜びを味わい、生涯にわたり書を愛好する心情をはぐくむとともに、感性を高め文字や書の効用を生活や社会の中で生かし、芸術としての書を通して生活を心豊かにする態度を養う。

各項目は、資質・能力の3つの柱と対応しており、①は知識・技能、②は思考力・判断力・表現力等、③は学びに向かう力・人間性等となっている。これらの資質・能力は小中学校国語科書写において育成する資質・能力とつながるものと捉えており、かつ、高等学校国語科における、書写能力を実社会・実生活に生かすことや、多様な文字文化への理解を深めることといった資質・能力との関連を図ることが指摘されている。また、注意すべき点として①～③の資質・能力は相互に関連し合い、一体となって働くことが重要とし、学習の順序性を持って育成を図るものではないことが強調されている。特に、「知識」については、「思考力・判断力・表現力等」を育成する過程で育まれたり、思考・判断・表現する際に活用されたりすることが重要であるとし、「知識」においてはその内容の理解の質に主眼があり、「思考力・判断力・表現力等」においてはそれらを活用した表現意図や構想、鑑賞の質に主眼があるとする。「技能」についても、主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくことが重要であるとする。

そして、三つの柱をまとめて示されたのが以下の表である。

芸術科（書道）において育成を目指す資質・能力の整理

	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
高等学校 芸術 (書道)	<ul style="list-style-type: none"> ・書を構成する要素とその表現効果の視点から、表現方法、形式、書表現の多様性などについて理解したり、生活や社会の中での文字や書の働き、書の伝統と文化について書の特質に即して理解したりすること など ・感性を働かせて、意図に基づいた創造的な表現を構想し工夫するために、用具・用材の特徴を理解し、書の伝統に基づく効果的な書表現の技能を身に付けること など 	<ul style="list-style-type: none"> ・書のよさや美しさを感じ、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉えるなどして、感性を働かせながら、自らの思いや意図に基づいて構想し、表現を工夫すること など ・書のよさや美しさを感じ、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉え、歴史的背景、生活や社会、諸文化などとの関わりから、文字や書の伝統と文化の意味や価値を考えるなどして、書を味わって深く捉えること など 	<ul style="list-style-type: none"> ・書の特質に根ざし、よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る感性 ・書の創造的活動の喜び ・芸術としての書の創造的活動に主体的に取り組む態度 ・生涯にわたり書を愛好する心情 ・文字や書の効用を生活や社会の中で生かす態度 ・書の伝統と文化を尊重する態度 ・美しいものや優れたものに接して感動する、情感豊かな心としての情操 など

次項では、「審議の取りまとめ」を受けて、今後の書道教育の方向性を見定めながら構想した新たな書道授業の実践を紹介する。今回は書道Ⅰに的を絞り、共同研究者全員が詳細な学習指導案及びルーブリックを作成して実践を行なっているが、ここでは紙幅の関係で、漢字仮名交じりの書、漢字の書、仮名の書、鑑賞の4例を紹介するにとどめた。また、学習指導案の冒頭に示した【授業の要旨】と【資質・能力について】と本時案略案のみを示し、その後に【考察】を加えた。なお、【資質・能力について】は、育成したい「資質・能力」と育成したい「資質・能力」を評価する方法とに分けて記述している。

4. 授業実践の検討

4. 1. 漢字仮名交じりの書 三好達治の「雪」を書く

【授業の要旨】

三好達治の詩「雪」を意図に基づいて構想し、工夫して表現することを目指す。国語科書写で学んだ漢字と仮名の調和を踏まえ、詩を朗読する時の読み方や、詩の描き出す情景、詩の多彩な解釈等を手がかりにして、文字の大小や潤濁、運筆の強弱や速度の変化といった用具・用材を生かした表現方法、行立てや行間、余白の在り方等を考えた全体構成、書表現の多様性を追求していく。言葉と表現との関係を考え、理解していくことを学習の目標に置く。

【資質・能力について】

・育成したい「資質・能力」

「漢字の書」及び「仮名の書」の学習で獲得した表現方法や形式、書表現の多様性を生かして、主体的に取り組み、創造する喜びを味わいながら、自らの考えや意図に基づいて構想し、表現を工夫する力を育成する。また、制作した作品成果を相互に鑑賞することにより、個を尊重し、各自が持つよさや美しさなどを感じ取る感性を育成するとともに、情感豊かな心としての情操を養う。

・育成したい「資質・能力」を評価する方法

「漢字と仮名の特性を生かし、自らの考えや意図に基づいて構想し、表現を工夫して作品を制作する」というパフォーマンス課題を設定する。また、ルーブリックを活用した学習過程の評価、ワークシートに蓄積されたポートフォリオによる評価を統合して評価を行う。

本時案略案（荒井作成）

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字と仮名の調和について確認する。 ・本時は感性を働かせて、意図に基づいて構想し、工夫して表現することを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の学習について想起するように促す。 ・本時は感性を働かせて、意図に基づいて構想し、工夫することを示唆する。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・三好達治「雪」を知る。 ・三好達治「雪」を、心を込めて音読する。 ・気持ちを込めて音読することで、声の大きさや読む速度、間の取り方に変化が生じることを知る。 ・授業者の範書を、授業者の意図を考えながら観察する。 ・授業者の意図したところを考え、発表する。 ・音読以外にも、詩の作り出す情景や太郎と次郎の関係など、構想や工夫に生かせる観点があることを理解する。 ・自らの意図に基づいて、文字の大小、配置、行間、余白の取り方、墨の用い方等を工夫して草稿を練る。 ・草稿をもとに意図を持った制作を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・三好達治「雪」のプリントを配布する。 ・心を込めて音読するように促す。 ・俳優やアナウンサーが詩を朗読する時に、なぜ情感豊かに表現できるのか、その要因を考えるように働きかける。 ・音読で気づいたことを含めて、意図に基づいた表現を意識して範書する。 ・雪の降る情景を意識して表現し、言葉の意味と表現の関連について気づかせるようにする。 ・詩の持つ音律や世界観、情景、太郎と次郎の関係等、作品の構想や工夫に生かせる観点について深く考えるように働きかける。 ・自らの意図に基づき、文字の大小、配置、行間、余白の取り方、墨の用い方等を工夫して草稿を作るように働きかける。 ・リズムよく筆を動かし、大胆に運筆するように促す。
終局	<ul style="list-style-type: none"> ・制作した作品を相互に鑑賞する。 ・相互に鑑賞することで、表現の多様性を実感する。 ・次時は、自らが選択した漢字仮名交じり文を、古典を生かして表現することを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの作品を鑑賞し、良い点を言葉で語りかけるように促す。 ・次時は、自らが選択した言葉を、書の古典の表現を生かしながら学習することを伝え、期待感を持たせるようにする。

【考察】

本授業は、言葉と表現の関係を重視して展開を図ったところに特徴がある。漢字仮名交じりの書において、感性を働かせて、構想し、表現を工夫する際の手がかりとして、詩の持つ言葉の力を活用していることは、主体的な学びを導き出すとともに言語活動にも視野を広げた取り組みとして考えることができる。また、終局においては、学習成果としての作品を互いに鑑賞することで、そこには対話が生まれ、個の学習を越えて共有化の図られた深い学びに繋がる試みと見ることができる。

4. 2. 漢字の書「行書を学ぼう 蘭亭序」

【授業の要旨】

「深い学び」を目指した臨書学習—籠字を生かし臨書をすることで、用筆や書風を主体的に学び、相互評価を行い意見交換しながら課題を解決することで、対話的な学びが実現し、自らの考えを広げ深めることにつながる授業。

【資質・能力について】

・育成したい「資質・能力」

蘭亭序のよさや美しさを感じ、蘭亭序を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉える能力。また想像力や感性を働かせながら自らの思いや意図に基づいて構想し、表現を工夫する力。

・育成したい「資質・能力」を評価する方法

「パフォーマンス評価」を用い臨書作品や相互批評での問題解決の様子を、「ルーブリック評価」を用いて行動観察の様子を評価する。また、書道用語、知識等をまとめたワークシートはファイル等集積し「ポートフォリオ評価」をする。

本時案略案（五月女作成）

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・黙想しあいさつをする。 ・前時の学習内容を想起する。 ・本時の学習内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・用具用材が整っているか確認する。 ・簡単な質問をし、前時の内容を確認する。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・「蘭亭序」作品を教科書の折り込みを開き全文を鑑賞する。内容、背景等を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・蘭亭序の成立に関わる背景、本文の内容、本物の行方等エピソードも交え紹介し、興味を持たせる。 ・双鉤填墨を理解させ、拡大図版で確認させる。
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・双鉤填墨を知り、教科書の図版で確認する。 ・「天朗」部分の籠字をとる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・半紙大に拡大した「天朗」のプリントを用意し籠字をとらせる。 ・外形から本来の筆遣いを考察しながら書かせる。特に入筆の角度や取筆の形などに注意させる。決して塗りつぶすのではなく運筆によって空白を埋めさせる。
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・籠字を塗りつぶすのではなく、実際の筆遣いを用いて空白を埋めながら、角度や太さに注意しながら書く。 ・字形を整えるだけではなく、筆の角度や太細などの細かい部分の筆遣いも考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・籠字からはみ出たり、埋まらなかったりした箇所はより注意させる。
20分	<ul style="list-style-type: none"> ・考察を基に筆遣いを意識して臨書する。 ・範書を見て各自の考察、作品の課題を把握する。 ・課題をふまえ練習する。 ・相互評価を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・起筆や取筆、字形を捉えよく見て臨書するように促す。 ・教材提示装置を用い、「天朗」を範書して見せる。起筆や取筆、太細の変化等、途中説明を加えながら見せる。 ・適宜机間指導を行う。 ・隣の人と作品を交換し、相互評価を行わせる。互いによい点、改善点を指摘させる。
15分	<ul style="list-style-type: none"> ・他の人からの評価を参考にしながら各自の課題を再確認する。 ・再確認した課題を意識し練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・適宜机間指導を行い各々にアドバイスをする。
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の課題、筆遣いを意識しながら臨書するよう促す。
5分	<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ書きをした作品を提出し、本字の学習を振り返る。 ・片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・筆遣いを意識し、自ら考えながら臨書できたかを確認する。

【考察】

授業の要旨にも記載があるように、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業実践となっている。蘭亭序の持つ書美を理解し、その書風を生かしながら意図を持って表現することを試みている。基本的に、授業者からの書風についての説明をすることを控え、生徒自らが入念に籠字をとることでその特徴を主体的に捉えようとしている。次に、その籠字を活用して筆遣いを考察し、課題を設定して取り組んでいる。さらに、相互評価を行うことで対話的な学びが実現し、振り返りによりより深い学びを模索している。

4. 3. 仮名の書「仮名の書の創作をしよう」

【授業の要旨】

仮名については、臨書や鑑賞の学習を通じて学習の基礎を培ってきた。仮名文字の創造性や自らの鑑賞力を基に、その表現方法は多種多様であり、創作作品に展開出来ることを学ばせる。

古今和歌集の中から好きな和歌を選び、散らし書きの形で、創作へと発展させる。

その方法として、臨書や鑑賞で取り上げた高野切第三種の行書きの流れを基に、寸松庵色紙の散らし書きの形を学び、創作の手立てとする。

創作することで、仮名文字の美しさを感じ、日本の文化を尊重する心を育む。

【資質・能力について】

・育成したい「資質・能力」

仮名文字の成立した歴史的背景を踏まえ、古筆から学ぶことが出来る平安貴族の美意識や感性を、仮名の散らし書きの創作により学ぶ。

自らの意図や思いに基づき構想していく過程で、仮名文字成立の歴史を振り返りながら、その成立の意義や価値を気付かせる。

そして創作活動の喜びを味わい、生涯にわたり書を愛好する心を育みたい。

・育成したい「資質・能力」を評価する方法

- ① 仮名の表現は多種多様であるので、草稿の段階から試書に至るまでの創作過程を、草稿および複数の試書を提出させることで評価する。
- ② 知識や技能が身につけられているか、また、その過程で仮名古筆の基本的な変体仮名や連綿についての理解や応用力が習得出来たかを、創作作品により評価する。
- ③ 主体的に取り組み、創作することが出来たか、また創作することで、仮名書の美しさを感じ、その文化を尊重する心が育まれたかを、確認プリントを通じて評価する。

以上の①～③を総合的に評価する。

本時案略案（大野作成）

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
導入	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な用具を準備する。 ・ここまでの仮名の学習内容について想起する。 ・本時の学習内容について知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に向かう姿勢が整っているかどうかを確認する。 ・ここまでの仮名の学習活動について想起するように促す。 ・この単元の学習が、自らが選んだ和歌の創作であることを知り、その手立てとして、三色紙の鑑賞と、ちらしについての形を学ぶことを伝える。
展開	<ul style="list-style-type: none"> ・創作の手順を知る。 ・語句を決める。 ・作品の構想を練る。 ・草稿を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・古筆の臨書や鑑賞学習で習得した表現技法や感覚を生かして、創造的な表現を行うことを理解するように働きかける。 ・国語の教科書や便覧などを活用して、古今和歌集の中から書きたいと思う和歌を選ぶように促す。 ・寸松庵色紙から選んだ散らしの形に、高野切第三種から選んだ和歌のコピーを切り貼りして、その流れをつかむ。 ・この上に自ら選んだ和歌を当てはめていく。 ・その中に連綿の表現を一つは入れることを促す。 ・変体仮名を使うことで、同じ平仮名の繰り返し使用を減らし、変化もつけられるので、その使用を促す。

	・ 試書する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自らの意図に基づき、古筆の良さを生かして表現するように働きかける。 ・ 墨色、墨継ぎの位置など、工夫すべき点を考えるように働きかける。 ・ 字書の文字や集字資料をまねるのではなく、自らの表現に活用することを強調する。 ・ 行の高低や行間にも、変化をつけることを働きかける。
終局	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次時の学習内容を知る。 ・ プrintの感想欄を書き込み、試書とともに提出をする。 ・ 草稿も提出する。 ・ 片付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 次時には、仮名用半紙を使用して、まとめ書きを行うことを告げる。 ・ 作品が出来たら、印（学校で準備）を押して完成とすることも伝える。 ・ 草稿と試書は大切なものであることを伝え、全て捨てないように提出させる。 ・ Printのまとめが出来た者から静かに片付けるように促す。

【考察】

本授業は、仮名の書の学習において、臨書や鑑賞を通じて培ってきた書の見方や考え方を、創作という新たな課題に取り組むことで定着を図り、感性を働かせながら、自らの思いや意図に基づいて構想し、表現を工夫しているところに特徴がある。散らし書きの構成は、三色紙の鑑賞を基礎としながらも、連綿や変体仮名の使用、墨色や墨継ぎの位置、行の高低や行間の取り方等、様々な観点を意識した生徒自身の主体的な学びによって作られている。

4. 4. 鑑賞「書の鑑賞 ー博学連携と鑑賞メソッドー」

【授業の要旨】

新しい学習指導要領の方向性として、より「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められていく中で、「鑑賞」領域の学習が益々重要になってきていると考える。また、書写（国語）から書道（芸術）へ転換したばかりの一年次の学習においては、同じ文字を素材とする学習の先入観からの解放として、早期の段階でより芸術的な視点によって文字を捉える必要があり、その点でも、見る、感じる、比べる、分析する、考察する、言葉にするといった、書の「鑑賞」の基礎的トレーニングは絶対に欠かせない。

このような学習をより深い学びにすることを狙いとして、「博学連携」を取り入れた授業を展開する。「学芸員」との共同制作の授業として、目的から教材、内容や展開、実施に至るまで、互いの立場や視点で意見を交わしながら、授業を練り上げることにより、「表現」に偏りがちな授業をより「鑑賞」に特化した授業として、成立させることができる。これにより、この単元での学びは、高校の書道の授業の枠を超え、将来に渡って芸術に親しむ素地を作り上げることも期待でき、更にはこの学習の過程での様々な対話により、多角的な観点を身につけ、他者への理解を深め、個々の人間性の向上にも繋がる。

【資質・能力について】

・ 育成したい「資質・能力」

(1) 本単元で育てたい「資質・能力」

- ・ (書の学習の初期段階として、) 書を構成する要素とその表現効果の視点から、表現方法、形式、書表現の多様性などについて理解すること、など。
- ・ 書の特質に根ざし、良さや美しさなどの価値や心情などを感じ取る感性を身につけること、など。(このことにより、多角的なものの捉え方、見方を学び、広い視野と他者への理解が進み、社会性の向上にも良い影

響を与える。)

- ・(鑑賞メソッドを体験し身につけることで,) 生涯にわたり書を愛好する心情を育てる, など。
- ・(鑑賞素材を本物やより本物に近いものにしていくことで,) 美しいものや優れたものに接して感動する, 感情豊かな心を育む, など。

・育成したい「資質・能力」を評価する方法

基本的には「ポートフォリオ評価」をベースに, 単元内に止まらず, 長期的なビジョンで評価していかなければ, 十分不可欠な評価にはならないが, 単元内の評価としては, 授業で使用した「ワークシート」, 授業直後に実施する「振り返りシート」, 授業後に実施提出する「鑑賞課題」を中心に, 授業におけるグループ内での様子や発言, 全体学習での様子や発言を加味して総合的に評価していく。

本時案スケジュール (後藤作成)

sec.	ワーク	事項
0～5	授業内容説明	講師紹介～鑑賞の授業について (後藤) 準備物の確認 (教科書, 筆記具), 机上の状況
5～	PPT 開始	本日のテーマ, 「鑑賞の手順」解説 ※比べて見るとわかること
8～	ワーク 練習①	●観察する (似ている? 似ていない?) ～【練習】 雪舟「南無布袋和尚」(筆線の表情～書表現と絵画性)
15～	練習②	～【練習】 松井如流作品と拓本「石門頌」(学書から表現へ)
30～	WS① 蘭亭序	WS 配布～名前記入～ワークの説明 ◎教科書41～42ページを見ながら比較して (似ている字) (似てない字) を判別 該当する文字を□で囲んで, A, B のいずれかに …… 3カ所ずつ抽出 選んだ字の, どの部分がそう思うのか, ○で囲んで示し, 余白に説明
40～	確認	PPT 画像で検証, 解説 〈A〉似ている → 学んだ成果が発揮されている → なんとなく印象が似ている 〈B〉似てない → 意図的に工夫した? → たまたま書いたらそうなった? ※〈B〉の中でも, 全く変わってしまっているもの → 〈C〉
48～	まとめ①	「見つける」楽しさ …… 観察すること, その方法
	〈休憩〉	※休憩に入る前に, 次限の着席スタート時間について, ひとこと。
0～	WS①の確認	「鑑賞」は楽しい: 一人の気づき～話し合い → ※4人グループへ変更
2～	WS② 張瑞図	WS 準備 ～ (名前記入) ～ ワーク説明 PPT 画像で解説 ◎教科書56～57ページを見ながら, WS のルールを説明 → 似ている特徴を抽出して分類 〈A〉蘇軾 〈B〉黄庭堅 〈C〉米芾
5～	ワーク開始	該当する文字を□で囲んで, A, B, C のいずれか …… 2カ所ずつ抽出 選んだ字の, どの部分に対して, そう思うのか, ○で囲んで示し, 余白に説明
20～	確認	検証 ～ 班の代表者, 各班1つずつ説明 ※8班×2分=16分
36～	まとめ② ～比べる (応用)	「鑑賞」は楽しい=コツをつかむ …… 部分に注目し, 観察する 【事例】教科書56～57ページの図版=宋時代の書法の継承性を解説 ◎学びによって継承される特徴と個性との関係
40～	鑑賞の視点 (専門的)	PPT 画像を用いて観察方法の説明～部分のアップ=視野, 視点 【事例】出光美術館「書の流儀Ⅱ」の展示作品から → 見てわかること=見えた状態を, そのまま言葉で説明する

43-	学芸員の仕事	※作品に沿って観察し、見たままを客観的に考察 ～ 考察した事象から、復元することも可能……「観察力」の大切さ 美術館や学芸員に興味をもってもらうための解説 ◎ PPT 画像で → 美術館という職業～多彩な職務内容
45-	終了あいさつ	授業内容のまとめ、アンケートほか提出物の確認

【考察】

本授業は、出光美術館学芸員との博学連携での授業となっている。見る、感じる、比べる、分析する、考察する、言葉にするとといったキーワードを手がかりに、学芸員と教員という異なった立場や視点から授業を構想し、鑑賞に特化した授業となっているところに特徴がある。書のよさや美しさを、感じるという受け身の学習を越えて、比較・分析・考察することで能動的に展開することに成功している。また、個人の学習からグループへ、そして発表等を行うことで広がりや深さを加え、将来に渡って芸術に親しむ素地を作ることを見通していることが特筆される。（文責：荒井 一浩）

5. 研究を振り返って

平成28年12月21日、中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）を取りまとめ、学習指導要領の改訂の方向性を示した。これによると学習指導要領がおおむね10年に一度改訂されていることを踏まえ、「2030年の社会と子供たちの未来」を見据えることを求めている。2030年の社会が、受け身の観点に立つだけでは難しい時代となる可能性を指摘し以下のように述べる。

主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくために必要な力を身に付け、子供たち一人一人が、予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。

2030年には、情報技術の飛躍的な進化を背景として、手書きや書道を取り巻く環境も大きく変化していることが予想される。芸術科書道においては、このような状況を踏まえつつ、表現や鑑賞に関する資質・能力を高め、生活や社会の中の文字と書や書の伝統と文化と豊かに関わるようにすることが求められている。本年度中に改訂が予定されている高等学校学習指導要領では、芸術としての書の教科性やその特質を再検証しつつ、教科の目標や指導事項は、「思考力・判断力・表現力」「知識」「技能」ごとに再整理され、表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力として〔共通事項〕が新たに設定されることになっている。また、「どのように学ぶか」という観点から「主体的・対話的で深い学び」の実現を図り、学習過程の質的改善を求めている。これは、求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことを示したものと言える。

以上の方向性を踏まえ、芸術科書道の授業を構想し実施するに当たっては、各単元や授業を通してどのような資質・能力が育成されるのかを明確化した上で、三つの柱で示された資質・能力を往還させつつ、生活や社会における文字と書に豊かに関わる資質・能力を育むことや芸術教科として豊かな情操を培うことが求められる。本研究では、各授業において育成を目指す資質・能力を明確にした上で、生徒の学びの深まりを適切に把握するためにルーブリックを作成して実践を行ってきた。実践例は表現領域の三分野、鑑賞領域にわたっており、この種の実践的研究を推進するうえでの一つの方向性を提示することができた。

「漢字仮名交じりの書」の取組は「書は言葉を書く表現である」という視点に立ち、書かれた言葉と表現の関

係を考え、表現された作品の世界を味わって深く捉える授業に位置付けられる。前述の「見方・考え方」において「書かれた言葉」との関わりから、作品の意味や価値を見いだすという視点が示されている。これから、素材として文字や詩句を捉えるのではなく、「言葉」という視点に立った授業実践が一層求められるであろう。「漢字の書」の取組は、「書を構成する要素とそれらが相互に関連する働きの視点」から、生徒が主体的に古典を分析的に捉えた上で、表現活動へと展開する授業実践である。一般的にありがちな点画や文字の形状のみを捉えるのではなく、運筆・用筆という書字過程を意識しつつ古典を捉えるように工夫している。「仮名の書」の取組は、臨書から創作へと展開する一つの方法論を提示している。生徒にとって、仮名の書の創作は、制作された作品という結果を評価する視点では、表現の深まりのなさが指摘されることが多く、教員が作品例を与えてしまうことが多い。本取組は、段階的に生徒が主体的に表現を深めていく一連の制作過程全体を見据えた実践であり、それを振り返ることで、次の表現活動へ生かすことができるようにしている。「鑑賞」の取組は博学連携による授業実践であり、近年の鑑賞学習の手法を導入し、教員と学芸員による綿密な授業計画の策定により授業を行っている。永続的な書への愛好心を育む視点から、鑑賞学習の充実が求められている。作品を味わって深く捉え、その意味や価値を考えることを通して、生涯にわたり豊かに書と関わる資質・能力を育むような実践的研究がますます大切となろう。

今回は、紙面の都合もあり、実践例の提示は4件にとどまり、実際に使用した学習材等の提示を行うことができなかった。今後は、新学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえながら、多角的な視点をもって実践を確実に広げていきたい。また、これらの成果を整理・統合し、有為な芸術科書道の教員養成に資する観点から研究を推進して新たなテキスト作成へと展開するとともに、大学での授業で活用を通して、検証・考察を加えつつ改善を図っていきたいと考えている。

(文責：加藤 泰弘)